

なが い あきら
永 井 彰

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文第271号
学位授与年月日 平成23年4月14日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 ハーバーマスの社会理論
——視座と方法

論文審査委員 (主査)
教授 正村 俊之 教授 長谷川 公一
教授 佐藤 嘉倫

論文内容の要旨

本稿の課題は、ユルゲン・ハーバーマスのテキストを一つの社会理論として読み、その論理構造を明らかにすることである。社会理論とはさしあたり、経済や政治といった社会の特定の機能領域に焦点をあてるのではなく、それらを包摂する社会そのものを主題とする理論として理解しておきたい。ここでわれわれは、『コミュニケーション行為の理論』(以下『理論』と略記)を主たるテキストとするが、それをこんにちの時点で読むことをこころみる。こんにちの時点で読むということは、次の二つのことを意識するという表明を意味する。まず第一にハーバーマスは、『理論』以降も多くの作品を執筆してきた。社会理論の仕事としては、『事実性と妥当性』(以下『妥当性』と略記)があり、この作品の存在を無視しては、現時点でのハーバーマスの仕事は理解しえない。第二に、『理論』の鍵概念をなすコミュニケーション行為の概念については、『理論』以降、いくつかの点で修正が加えられてきた。そのため、コミュニケーション行為理論をこんにちの時点で読むためには、そうした修正点についても視野に入れる必要がある。つまり『理論』以降に執筆された作品の存在を知っているという前提のもとで、われわれは、『理論』を主要テキストとしてハーバーマス社会理論の論理構造を明らかにする。

ここでわれわれは、一つのスタンスを選択している。つまり、『理論』をある種の歴史的文書として取り扱うのではなく、変動しつつある理論体系の主たる構成要素を提出している著作として取り扱うという選択である。より具体的にいうなら、コミュニケーション行為の概念を基軸とし、生活世界とシステムという二層の社会概念によって現代社会のありようを解析する一つの理論体系の基本的な組み立てを呈示した作品として『理論』を位置づけるという態度決定である。ここでわれわれは、『理論』の内容は、たしかにその細部においては修正されてはいるけれども、少なくともその基本的な点にかんして

はその後も維持されているという認識に立脚している。

われわれは、ハーバーマスを精確に読むことをめざす。われわれからするなら、この言明は、一つの方法的態度を意識的に選択することを表現している。われわれはここで、精確に読むということの意味をより明確にするために、他の二つの読みを引きあいに出し、それらとの差異を示す。その一つは、テキストから自由に読むという方法であり、もう一つは、テキストを忠実に読むという方法である。このうち、一つ目の自由に読むということについては、多くの説明を必要としないだろう。端的に言えば、読み手の側の関心にてらして、テキストのなかから、利用可能なところを切りとるという手法である。ここで根本的なのは、読み手の側にある何らかの物語であり、個々のテキストは、読み手が構築する論理のなかのパーツとして利用される。これにたいして、精確に読むという方法にとって決定的なのは、テキストに内在する論理である。ここで問題となるのは、もう一つの区別である。たしかに読み手の関心のためにテキストを利用しようとするのではなく、テキストそのものにそくすことをめざすかぎりにおいては、この両者は同じである。だが、忠実に読むということにとって決定的に重要なのは、テキストの文言そのものであるのにたいして、精確に読むという方法にとって重要なのは、このテキストを貫いている論理構造なのである。前者が「ハーバーマスが何を語っているか」を問うのにたいし、後者は「ハーバーマスがどのように語っているか」を問題とする。この点において、忠実に読むことと精確に読むこととは、区別される。そのうえで問題になるのは、いかにして精確に読むかということである。つまり、精確に読むための方法とは何かということが問われる。この問いを考えるにあたって、ハーバーマスのテキストにそくしていれば、二つのポイントがある。その一つは、パースペクティヴの転換と抽象水準の移行とを意識して解釈するということである。われわれのみるところでは、ハーバーマスは、このような理論構築上の技法を明確に意識して議論を組み立てている。しかし、これまでのハーバーマス論は、こうしたハーバーマスの理論構成を正当に取り扱ってこなかった。そのため、誤解が生じるはずのない論点で誤解が生まれたり、あるいはまったく的はずれな批判がハーバーマスに向けられたりもした。もう一つのポイントは、ハーバーマスの記述スタイルとかかわっている。ハーバーマスは自説を展開するにあたって、他の理論家のテキストを読み解しそれにコメントを加えるというスタイルをとっている。少なくとも、『認識と関心』、『理論』、『妥当性』といったかれの名著はすべて、このスタイルのもとに執筆されている。一見すると、これらをハーバーマスが学説史的な関心のもとに執筆しているかのようにうつる。しかし、そこで書かれていることは、明らかに自説の展開である。そうだとすると、他の理論家へのコメントであるかのようにみえるテキストであっても、そこからハーバーマスが何を語ろうとしているのかを読み取っていくことが必要となる。

われわれは、『理論』を主要テキストとして取り扱っているが、その全体を検討対象としているわけではない。それには、『理論』というテキストの構成にかんする解釈がかかわっている。『理論』の構成についてまず第一に指摘できるのは、そのなかで決定的に重要なのが二つの中間考察（第3章と第6章）であるという点である。中間考察第一においては、コミュニケーション行為の概念が呈示される。さらに中間考察第二の前半部においては、コミュニケーション行為の相補概念として生活世界概念が位置づけられ、アルフレート・シュッツの生活世界概念を手がかりとしながら、それをコミュニケーション理論の視角から再構成するという作業をつうじて、生活世界概念が社会理論の基礎概念として鍛えあげられていく。また中間考察第二の後半部においては、生活世界とシステムという二層の社会概念を用いることの首肯性を説明するために、部族社会から近代社会へといたる社会発展の過程を、生活世界からシステムが遊離する過程として描きだす。ハーバーマスは、この二つの中間考察において、みずからの理論を系統だって説明しようとしている。

第二に、この著作のそれ以外の部分は、この中間考察との対比において理解する必要がある。つまり、自説を系統立てて展開している箇所は、あくまでもこの二つの中間考察なのである。さしあたりここで確認しておきたいのは、序論と中間考察との位置関係である。序論は、あくまでも導入部であって、ここに登場する概念はあくまでも暫定的なものである。これにたいして、二つの中間考察では、ハーバーマスの自説が展開されている。

第三に、社会理論としてハーバーマス理論を解説するという関心にてらしていうと、二つの中間考察以外には、最終考察（第8章）が重要になるのは当然であるが、それに加えて、第7章のパーソンズ論が重要であることを見落としてはならない。生活世界とシステムという二層の社会概念の首肯性を検証するうえでも、コミュニケーション・メディア論を展開するにあたって、さらにはシステム理論を社会理論のなかにどのように組み込んでいくかを考察するうえでも、パーソンズ論への参照は欠かせない。ただし、この読解にさいしては、パーソンズにたいするハーバーマスのコメントのなかから、ハーバーマスが自説のなかに取り入れようとする部分を区別して読みとっていく必要がある。

われわれは、『理論』のテキストをこのように位置づけるために、本論文の第2章では『理論』の第3章、第4章では『理論』の第6章を主たる検討対象としている。さらに本論文の第5章では、『理論』の第6章、第7章および第8章を用いている。

われわれは、社会理論としてハーバーマス理論を取り扱うというスタンスをとることによって、ハーバーマスについての一つの解釈案を意図的に排除している。すなわち、ハーバーマス理論を純粋に規範理論として理解しようとするところみである。ここで純粋にという限定を付与しているのには、意味がある。規範理論という表現には曖昧さがつきまわっている。定義によっては、ハーバーマス理論を規範理論だということもできるし、そうでないということもできる。ここでわれわれが明確に否定したいと思っているのは、ハーバーマス理論は社会のあるべき姿や理想像について語っているのであって、そうした理想像に照らして現実の社会を批判するという論理構成をとっているとする理解である。

われわれは、この論文において『理論』を主要テキストとしながら、その後のハーバーマスの仕事を視野に入れて、社会理論としてハーバーマス理論を取り扱い、その論理構造を明らかにする。このような仕事をわれわれがいまころみているのは、ハーバーマス研究のなかでこのような仕事が十分になされてこなかったと認識しているからである。ハーバーマス理論については、モノグラフ的な研究が必要である。ハーバーマスの理論は高い複合性を有しており、その内容を深く検討し評価するためには、まとまった分量の紙幅をどうしても必要とするからである。われわれのみるところでは、『理論』のなかからハーバーマス社会理論の理論的論理を析出し、そのアクチュアリティを探るという仕事は十分にはなされてこなかった。英米語圏においては、『理論』におけるハーバーマス社会理論を系統だてて理解し検討する作業が、ともかくもころみられてきた。しかし、日本ではそうした研究は、まとまった形ではなされてこなかった。この事態がいささか問題だと思われるのは、ハーバーマス社会理論の内在的理解という課題が未消化であるにもかかわらず、あたかも解決済みの主題であるかのように片づけられてしまいかねないからである。ハーバーマス社会理論については、誰もが知っているように思っている。しかし、何が共通理解なのかすら、判然とはしない。ハーバーマス研究においてスタンダードと目されるものがない。われわれの仕事は、ハーバーマス研究上のこの欠落を埋めることをめざしている。

われわれはこの論文において、ハーバーマスの社会理論がどのような方法と視座のもとで構築されているのかを明らかにする。そのさい、検討の中心は、ハーバーマス社会理論の実質的内容へと向けられる。しかし、それはただたんにハーバーマスのテキストをそのまま読むということではなく、そのテキストのなかにどのような理論構築の方法が駆使されているのかを読みとることでもある。ハーバーマス

は、少なくとも主著とみなされるようないくつかの著作においては、理論構築の方法を明確に意識して議論を組み立てている。それゆえ、ハーバーマスがどのような理論構築の方法をとっているのかに留意しなければ、ハーバーマスのテキストを精確に理解することはできない。

第1章では、テキストの解読にいたる前の予備的な作業として、われわれがいかなるコンテキストに位置づけてハーバーマスのテキストを理解するのかということ論じる。われわれは、社会理論としてハーバーマス理論を取り扱うという選択をおこなった。そのことをふまえて、まず社会学における社会理論の展開史を概観し、そのなかにハーバーマスの社会理論を位置づけるという作業をおこなう。生活世界とシステムとからなる二層的なものとして社会をとらえるというハーバーマスの理論戦略は、直接的にはパーソンズ社会理論にたいする代案呈示のこころみとして理解できるが、社会学における社会理論の展開史をふまえれば、後期資本主義社会の現実に対処することを想定したときに、マルクスが上部構造として捨象した社会性の領域を社会理論のなかに適切に取り入れようとする企てとして解釈しうる。

第2章では、『理論』のテキストをもとにコミュニケーション行為理論の検討をおこなう。コミュニケーション行為をめぐる議論において、一つの重要な論点はコミュニケーション行為と戦略的行為とをどのように区分するかということであった。ここでわれわれが確認しておきたいのは、ハーバーマスはこのことを議論するにあたって、三つの段階をふまえて議論をしているということである。まず第一段階においては、行為指向による区別がなされる。ここでは、行為者じしんのパースペクティヴが前提とされ、意思疎通に指向した行為がコミュニケーション行為であり、成果に指向した行為が戦略的行為であるとされる。だが、この記述においては、個々の行為者の選択が基底であるかのような印象を与える。つまり、行為者はそのつど行為指向を決定できるわけであり、コミュニケーション行為をするか戦略的行為をするかは、当の行為者しだいということになる。そうしてみると、行為のあり方にとって、行為者の意図が決定的であるかのようにみえる。たしかに、個々の行為を切り離して考えると、このことは正しい。だが、ハーバーマスは、コミュニケーション行為の説明をここで終えているわけではない。この説明だけによって、ハーバーマスによるコミュニケーション行為の定義と理解することは不適切である。第二段階においては、ハーバーマスは、言語行為論の成果を手がかりとし、オースティンによる発語内行為と発語媒介行為の区別を再構成する。この段階では、相互行為のなかでのやりとりが主題化され、相互行為に参加する行為者の行為遂行的態度に光が当てられる。この論理のなかで、行為者の意図が相対化され、自我と他我のあいだの対話関係こそが基底的なものとみなされる。ここで重要なのは、発語内行為の目標は、発話者の意図によっては決定されないという点である。つまり、発語内行為の目標は、やりとりのなかではじめて定まるものとみなされる。第三段階において、ハーバーマスは、妥当性要求の呈示と承認という契機を対話関係のなかからつかみだす。コミュニケーション行為が戦略的行為かを分けるメルクマールは、妥当性要求の相互承認という論理が作動しているかどうかという点にあるとされる。

第3章においては、「合理性」論文をもとにコミュニケーション行為理論の最新版の検討をおこなう。ここでも問題になるのが、コミュニケーション行為と戦略的行為の区分であるが、「合理性」論文においても、妥当性要求の相互承認という論理がメルクマールとされている。つまり、妥当性要求の相互承認という論理が相互行為のなかで作動しているかどうか、またどこまで作動しているかという基準で、行為類型論が構築されることになる。そのさい、三つの妥当性要求すべてが関与しているばあいが、強いコミュニケーション行為であり、真理性要求と誠実性要求だけが関与しているばあいが弱いコミュニケーション行為である。また、妥当性要求がまったく関与しないばあいが、戦略的相互行為である。妥当性要求の相互承認という論理が基底であるという点において、『理論』の段階での着想が基本的に

維持されている

第4章においては、生活世界論の展開について取り扱う。ハーバーマスは、社会理論の基礎概念として生活世界の概念を位置づける。社会理論の基礎概念として適切なものへと生活世界の概念を鍛えあげようとする。そこでハーバーマスは、シュッツの生活世界論を出発点としながら、それを再構成することによって、この理論的課題をはたそうとする。ハーバーマスはここでもまた、順を踏んで議論をすすめている。ここでは、ハーバーマスの生活世界概念を二つの段階に区別して考える。われわれは第一段階のそれを、言語行為論的な生活世界概念、第二段階のそれを再生産論的な生活世界概念と特徴づける。まず第一段階においては、シュッツの生活世界概念を言語行為論的に再構成する。ハーバーマスからすると、シュッツの生活世界の概念は行為者の意識を準拠点としている。つまり、生活世界は、行為者にとって自明な意味基盤をなしている。ハーバーマスは、この概念を、言語行為論をもとに再解釈し、コミュニケーション行為と生活世界とを相補的な関係にある概念とみなす。コミュニケーション行為をいとなむ行為者は、生活世界を意味基盤として利用する。自明な意味基盤としての生活世界は、コミュニケーション行為がおこなわれることによって受け継がれる。ここでは、相互行為参加者のパースペクティブが前提とされている。このことをふまえたうえで、ハーバーマスは、第二段階として、再生産論的な生活世界概念へと移行する。そのさい、ハーバーマスは、資源としての生活世界という考え方を打ち出す。つまり、コミュニケーション行為は生活世界を資源として利用することによって成り立つ。生活世界はコミュニケーション行為によってのみ再生産される。ハーバーマスは、この概念設定をふまえて、生活世界の概念を拡張する。つまり、コミュニケーション行為にとって資源として利用されるものとしての生活世界という考え方を提起し、生活世界の構成要素として、文化、ゲゼルシャフト、パーソナリティの三者をあげる。このこととの関連で、ハーバーマスは、シュッツの生活世界論が文化的なものに切りつめられていたとみる。論理のこの段階では、相互行為参加者が実際に遂行していることを再構成的にとらえなおすという社会理論家のパースペクティブへと、パースペクティブが転換しており、生活世界の再生産という局面が主題化されることになる。

第5章では、システムと生活世界という二層の社会概念の論理構造を解明する。ハーバーマスは、この社会概念の構成において、視座の転換と抽象水準の移行という理論技法を駆使している。

まずハーバーマスは、抽象の第一水準として、生活世界とシステムとを質的に異なった行為連関として対比的にとらえる。そのさいハーバーマスは、二つのステップを踏んで議論を進める。まず第一に、生活世界とシステムの区別そのものは、コミュニケーション行為理論の視角から導入されている。生活世界は、コミュニケーション行為によってのみ再生産され、その当事者によってすでに意味的に構成されている。システムは、そうした生活世界から自立化した行為連関である。システムにかんするこの特徴づけは、生活世界の特徴づけを前提とし、それとの対比においてはじめてなされる。そのかぎりにおいて、生活世界とシステムの対比は、コミュニケーション行為を営む当事者のパースペクティブをその論理的前提としている。第二に、生活世界とシステムとには、それぞれ異なった理論的アプローチが要請される。生活世界をとらえるためには、行為者のパースペクティブを出発点とする行為理論的方法ないし解釈学的方法が必要とされる。他方、システムについては、観察者のパースペクティブからその運行法則を客観的に把握するというアプローチが採用されなければならない。この理論アプローチはシステム理論として特徴づけられる。

抽象の第二水準においては、コントロール・メディアをつうじた生活世界とシステムとの相互交換過程が主題化される。論理展開のこの段階においては、生活世界とシステムとがそれぞれ具体的な行為領域に関係づけられながら論じられており、抽象の第一水準の議論と比較すると、議論がより具体的な水

準へと移行している。ここでの議論は、観察者のパースペクティブからなされている。しかし、ここで留意しておかなければならないのは、生活世界とシステムの区別そのものは、抽象の第一水準の議論をそのまま引き継いでいるということである。

さらにハーバーマスは、この水準での議論をふまえて、コントロール・メディアのもつ抽象化作用を主題化する。ハーバーマスは、この論点に踏み込むさい、生活世界の成員としてシステムとの相互交換過程に関与する行為者のパースペクティブを手がかりにする。そのことによって、システムとの相互交換過程に入ることが生活世界の側にどのような影響を与えているのかが分析され、そうした影響が生活世界の成員にいかなる意味において負担を与えているのかが明らかにされる。

ハーバーマスは、この議論をふまえて、「システムによる生活世界の植民地化」といった事態を主題化する。そのさいかれは、コントロール・メディアの抽象化作用という論点からさらに踏み込み、社会国家的調整という社会的・歴史的な文脈へとこの議論を関連づける。このような論理展開をへて、生活世界とシステムという二層の社会概念は、社会国家体制下での社会病理の解明という現代社会論的な議論へと結びつく。われわれがさしあたりここで確認しておきたかったのは、このような論理の構築法である。

さらに終章では、われわれじしんの読みの方法やその特徴を明示化するという目的のために、佐藤慶幸によるハーバーマス解釈を検討する。またそれとの関連において、理想的発話状況概念の位置づけについて論じる。

佐藤慶幸の解釈においては、コミュニケーション行為は、対話的行為と解釈しなおされ、既成の価値や生活様式にとらわれることなく、討議をつうじて新たな社会関係を構築する営みとして位置づけなおされる。佐藤慶幸の作品のなかでは、アソシエーションへの関心とハーバーマス読解とが、直接的に結びついている。このようなやり方は、ハーバーマスの読解としてみれば、いくつかの問題をはらんでいる。まず第一に、コミュニケーション行為はあくまでも、意思疎通に指向した行為いっばんを指す概念として用いられているのであって、妥当性要求そのものを主題化することではない。第二に、コミュニケーション行為を対話的行為として読みかえていく解釈は、ハーバーマス理論を、自覚的で意志的な対話の営みを過度に強調する問題構成として理解することにつながる。第三に、佐藤慶幸が指摘するところのハーバーマス理論の混乱や不整合は、ハーバーマス理論の論理構造をたどるという読み方をすれば、みいだされない。

佐藤慶幸による読解は、コミュニケーション合理性の担い手を自覚的な市民やそのアソシエーションに限定するという方向を示唆しており、結果的にみれば、主体性を強調する理論としてハーバーマス理論を読み込んでいる。しかし、われわれの考えでは、この読みの戦略は、ハーバーマス社会理論のもつ可能性を最大限に生かす方途ではない。むしろ日常性のなかにコミュニケーション合理性がはらまれていることを読みとることができるところに、ハーバーマス社会理論の可能性の中心がある。

われわれの基本的なスタンスは、ハーバーマス理論を過剰に理想主義的に読み込まないということである。このこととの関連において、理想的発話状況概念の位置づけという問題を取り扱う。われわれは、ハーバーマス社会理論の論理構造を解析してきたが、そこではいっさい理想的発話状況の概念に言及してこなかった。それには、実は明確な理由がある。われわれのみるところでは、コミュニケーション行為理論における説明の論理としては、理想的発話状況の概念は用いられていないからである。たしかに理想的発話状況という術語は『理論』の序論には登場するが、そこでは、その概念規定についての説明はなされていない。さらに、中間考察第一において、コミュニケーション行為理論の詳細を説明する箇所においては、理想的発話状況概念はまったく使用されていない。このことをふまえて、われわれは、『理論』においては、理想的発話状況概念は事実上放棄されていると解釈している。他方、ハーバーマ

スが理想的なコミュニケーション状況を想定し、そこから現実のコミュニケーション状況を批判的にとらえているとする理解は、ハーバーマス解釈上広く受け入れられているが、そのさいにしばしば引きあいにだされるのが、理想的発話状況という概念である。

われわれの理解では、『理論』においてコミュニケーション行為と生活世界とが相補概念として位置づけられたということが、理論的に決定的な意味を持つ。コミュニケーション行為は、生活世界を資源として利用することによってなりたつ。他方において、生活世界は、コミュニケーション行為が営まれることをつうじて再生産される。こうした論理構成のなかで、コミュニケーション行為は生活世界という場をえた。コミュニケーション行為は、具体的な日付と空間のなかで営まれるほかない。言語的意思疎通は、批判可能な妥当性要求の相互承認にもとづくという論理構造をもともと保持している。この言語的な意思疎通は、生活世界という現実的な基盤のなかでおこなわれるのであり、生活世界のあり方によって大きく左右される。批判可能な妥当性要求の相互承認という論理がどれほど貫徹するのかは、個々の生活世界によって異なる可能性があるが、そうした差異それじたいは、相互批判を許容する文化がその生活世界のなかでどれほど形成されているかといった経験的に追究されるべき問題である。

この論点は、理念的なものとの現実的なものとのかわりをどのようにとらえるのかという問題にかかわっている。理想的発話状況概念は、コミュニケーション行為が作動する論理を説明するにあたって、現実にはない理想的な状況を参照している。理想的な生活形式をいまここにある状況のなかで先取りするという論理は、いくらそれが現実に機能する先取りであるとしても、発話するというふるまいの外部に理念的なものが存在することを示唆している。それにたいして、『理論』のなかで採用されている論理にしたがうなら、理念的なものの契機はひとびとが日常的におこなうコミュニケーション行為それじたいのなかにはらまれている。妥当性要求の呈示と承認という過程は、現実の言語行為のなかで遂行されている。だから、そのことについては、それ以上の説明の論理を必要としていない。ハーバーマスの社会理論の独自性は、妥当性要求の相互承認という契機が社会の再生産過程のなかにはらまれていることを、理論のなかに組み込んでいるという点にある。ハーバーマスの社会理論は、理想的なものを現実の社会過程の外部に措定して、そこから社会を批判するという理論ではない。またあるべき社会の姿を論じた理論という意味での規範理論でもない。われわれの考えでは、事実性と妥当性の緊張を視野に入れて社会学的な仕事をすすめていくことこそが、ハーバーマス理論を生かす方途である。

論文審査結果の要旨

本論文は、ユルゲン・ハーバーマスの『コミュニケーション行為の理論』の全体像を描き出すとともに、それが社会理論の歴史のなかでもつ意義を明らかにしたものである。全体は、序章と終章を含む7つの章からなる。

序章では、本論文の視座と方法が述べられる。『コミュニケーション行為の理論』を社会理論として位置づけたうえで、そこに通底する論理構造を抽出し、それに即してこの理論を読み解くことが本論文のねらいであることが述べられる。第1章では、マルクス以降の社会理論の歴史が概観され、『コミュニケーション行為の理論』が「社会理論のコミュニケーション論的転回」をはかった理論であることが指摘される。第2章では、ハーバーマスによる「コミュニケーション論的転回」がどのような論理のもとで遂行されたのかが分析される。「道具的行為」「戦略的行為」が成果指向的な行為であるのに対して、「コミュニケーション行為」は意思疎通的な行為であり、妥当性要求の相互承認によって特徴づけられ

ること、そしてハーバーマスの議論が規範論的であるという通説に対して、妥当性要求の相互承認が行為者に主題化されないまま事実性のレベルで成立しうることが明らかにされる。第3章では、「コミュニケーション行為」に対するハーバーマスの現時点での捉え方が検討され、「コミュニケーション行為」概念において若干の変更があったものの、基本的な認識は変化していないことが確認される。

以降の章は、上記の基礎理論を踏まえてハーバーマスの社会理論がどのように展開されたのかが示される。第4章では、ハーバーマスの「生活世界」論が主題化され、「生活世界」が「コミュニケーション行為」を成立させる基盤であると同時に「コミュニケーション行為」によって再生産されることが指摘される。第5章では、「戦略的行為／コミュニケーション行為」という二つの行為概念と「生活世界／システム」という二つの社会概念との対応関係に言及しながら「生活世界」を越えた行為領域として「システム」が出現し、その「システム」によって「生活世界」が植民地化される論理的プロセスが説明される。そして終章では、「論理構造の解明」「パースペクティブの転換」「抽象水準の移行」という本論文の方法的特質とそこから導かれた結論、そして従来のハーバーマス研究との相違点が述べられる。

これまでハーバーマスの理論は「理想的発話状況」という外部の超越的な地点から現実を批判する規範論として批判されてきたが、マルクスが資本主義を事実内在的な論理に依拠して批判したように、ハーバーマスの理論もコミュニケーション行為の事実内在的な論理に立脚した批判理論であるということを示した点に、本論文の大きな特色がある。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。